星の闇。

月影れん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星の闇。

【Ｎコード】

Ｎ７７５５Ｆ

【作者名】

月影れん

【あらすじ】

クリスマスラスト１０分です。ギリギリ間に合ったー。クリスマス小説です。快斗（キッド）×哀ななのでご注意を。一人、夜空を見ていた哀の元にキッドが……。哀の心を、キッドが癒していく……。

（前書き）

注意）快斗×哀です。

私の名前は灰原哀。
今、私は空を見ていた。
恐ろしいほど真っ黒な残酷な夜空よ。
数えるほどしかない小さな小さな星が、散りばめられているだけ。
虚しいわ。
月は意地悪な雲に隠されて今は見えない。だけど、もうじき見えるようになるでしょうね。

それにしても今日は冷えこむ。さっきから冬の冷たい風が私の頬を刺す。
このままだと体が冷えて風邪をひく。
なのに、どうして窓を閉めないのかしら……。

今日は聖夜前日（クリスマスイヴ）。今は午前１１時３０分を過ぎたころ。
今日は明日のパーティーの準備で忙しかったわ。
みんな、はしゃいでいて、楽しそうだったわ。
だけど、今の姿の年齢相応の反応は出来ない。
いえ、それどころか、本当の年齢相応なことも何一つ望めない。
クリスマスには毎年（いつも）、お姉ちゃんがいたのに……。
お姉ちゃんの彼氏さんも交えてクリスマスパーティーをしたこともあったな。
彼、私は好きにはなれなかったけど、お姉ちゃんは誰よりも彼を愛していた。
そんな空間がとても温かかったのも事実。
だけど今は、その温もりが遠ざかっていって、冷えきってしまって、”彼ら”優しさが熱すぎて戸惑ってしまうこともあるけど……。彼らの温もりに溶かされつつある。

冷たい風はなお、私を刺す。叩く。通り過ぎる。
撫でる……？

私は、ふうっと小さく息を吐いた。
あ……。
頬の上を何かが通った。
海水みたい……。
気付いたら、私は泣いていた。だけど何故かは分からない。いいえ、分かりたくないのかも知れない。

「……お姉ちゃん」

分かっていた……。無意識に口から出た言葉。
その懐かしい響きに、余計に涙が溢れる。
私の涙はポトリポトリと、窓の外に堕ちていく。
とてつもなく深く黒い闇に飲まれていく。私自身。

私は、近くにあった桃色の水玉模様のタオルに手を伸ばした。これは、お姉ちゃんが私の誕生日に買ってくれたやつと同じデザイン。
最近デパートで見つけて懐かしくて、買ったモノ。
私は、それで溢れ出た涙を静かに拭った。

――その時だった

コンコン

窓を叩く音。その音の中になぜかどこかに優しさがあった。
私は、反射的にタオルを顔から離した。涙は完全に拭い切れてなかったけど。

私は、外を見て思わず驚愕してしまった。
「あ……！」
「こんばんは、お嬢様。夜分遅くにお邪魔いたしますご無礼をどうかお許し下さい……」
「……怪盗キッド！？」
瞳を擦っても、見えてくる風景（けしき）は変わらなかった。
「な……何の用？」
取り敢えず、用件は聞いておくわ。それにしても、自分のあまりに素気ない言葉（こえ）に我ながら驚いてしまった。
私は、さっきまで泣いていたことを悟られないように、少し顔を背けた。
彼にはもうバレているかも知れないけど……。
「お嬢さんに……いえ、お姫様に宝石をお返しするために参上いたしました」
「宝石？何のこと？」
相変わらず臭いわね。それじゃあ、言っている意味がよく分からないわ。
私、宝石なんて持ってないもの。
「これ……ですよ」
「え？」
彼はそっと、白い手袋を身につけた手をひろげた。
……でも、彼の手の中には何もない。
「何もないじゃない」

「そうですか？よく見て下さい。何よりも大切な宝石がありますよ？」
彼は、真っ直ぐ私の瞳を見ていた。私はそれから逃れるように視線を彼の手に移動させた。
私、人から真っ直ぐ（瞳を）見られるのあまり好きじゃないのよね……。

……やっぱり、何もないじゃない。
って思ったけど、子どものようにムキになっているいつもとは違う私がいる。
ん？今何か光ったわ。
よく目を凝らして見る。
これは、水滴……？
そこには、微量の水滴が付着していた。
これは……
「まさか、これ……」

「ええ。この宝石、空から降ってきたんです。どんな宝石よりも綺麗でした」
「……バカ」
「こんな綺麗な宝石を落としてしまうような、辛いことがあったんですか？」
キッドの声はとても優しかった。私はそれに耐えられずにちっぽけな意地を張ってしまう。
「ないわよ。そんな、そんな……」

……彼に話したい。
え？なんで？なんで、泥棒なんかに、そんな……。

「あなたには関係ないでしょ！？」

私は感情的になり、少々声を荒げてしまった。まったく……私らしくない。
私は優しくされることにとても不慣れなのよ。
優しくされることに”慣れ”なんてものがあるの？と問われたら、”私にはある”って言える。
実際、博士たちの優しさには、火傷してしまいそうだし。
「あなたは、どうして隠すのですか？」
「え？」

私には熱すぎるから。それに、弱い人間だって思われたくないから。

私の瞳からまた涙が溢れだした。
ああ、最悪。もう隠せないじゃない。
うつ向き気味に、上目遣いで上を見上げると、キッドと目が合ってしまった。
キッドは、ふわりと優しく微笑んだ。私の心の傷を全て分かってくれてるようなそんな感さえした。
キッドは口を開いた。

「……。あなたは今、辛いですか？」

「……はい」

涙ながらに言った言葉。
気味が悪いほどに恐ろしく素直な自分。
もう。本当、どうしちゃったのよ、私……。

「私に聞かせてもらえませんか？お力になれるかどうか分かりませ

んが……」

「いいわよ」

どうしてよ。
自分に問い掛ける。
誰かに苦しみを聞いてほしいから。
素直な自分が答えた。

「私のお姉ちゃん……殺されたのよ」
きっとあなたは驚くでしょうね。
あなたのような闇のような光は、こんな暗闇とは無縁でしょうから。
予想をしていた通り、あなたの反応は……
「……え？」
まぁ、当たり前よね。
家族を殺されるだなんて、経験してない人たちにはそうそう理解出来ることじゃないわ。この苦しみは。
私はいやになるほど頭中に浮かんでくる言葉を飲みこみながら続けた。
「私を追っている悪の組織にね」
そう言ったあと、なんだか自分が馬鹿らしくなってきた。本当の話なのになんだか創り話みたいで。
こんな子どもが言っても全然現実味がない。
この人も馬鹿にしているんじゃないかと、そう想像(おも)ってしまう。

私は、反応を確かめようと、キッドの顔を見た。
私はギョっとした。
キッドの顔は、悲しげに歪んでいたから。

「……私もです」

「え……」

彼の言っている意味がよく分からなかった。
息を呑んでじっと彼の顔を見つめた。

「実は、私の父も、殺されたんです……」
「え？」
私は驚いた。
「嘘……でしょ？」
「いえ、本当なんです。８年前に、不老不死の宝石を狙ってる謎の組織に、初代の怪盗キッドをやっていた父が殺された……」

私は、目を見開いた。
動悸が激しくなる。体中の血液が逆流しているような錯覚が私を襲った。
不老不死？そ、それって、まさか……。

「ん？どうかされましたか？お嬢さん……」

「ねぇ、それってどんな組織なの！？」
私は、つい声を荒げた。キッドは、少し困ったような表情（かお）をする。
「あ、いえ、ど、どんな組織と言われても……。
不老不死に関係すると言われているビッグジュエルという宝石を狙っているということしか……」

「そう……。（同じ組織とは断定できないわね）
私もそれと似た組織に両親と姉を……」
そう言った私の声は震えていた。
泣いている。
いや、泣かないで、私。耐えて……堪えて！！！

「堪えなくてもいいじゃないですか？」

「……え？」

私は、今にも泣き出しそうな顔（自分でも分かる）で、キッドを見上げた。

まぁ、見上げたといっても、キッドは、私と目線を合わせるために、屈んでくれているんだけどね。

つまり、私が俯いていたってこと。

「今は思い切り泣いてください。ここには、私と貴女しか居ないのですから。

確かに、堪えることも大事な時だってあります。ですが、今は……」

「貴女がいるから、思い切り泣けないわ」

私は、タオルでごしごしと涙を（顔を）拭いた。

ちっぽけな強がり。拗ねたように言う私がなんか可笑しい。

さっきまで泣いていたくせに。今の自分はどうかしているわね。

だけど、彼はそんな私に、ふわりと微笑みかけた。

私は、それに戸惑ってしまった。だけど、私の胸の底がじわじわと温かくなって堪らなくなる。

「そうですか？ですが、私は、貴女の苦しみを知っていますよ？」

「……ホントに？」

胸の奥が温かくなってゆく。じわじわという音がまるで耳にまで聞こえてくるほどに。

「ええ」

キッドの優しい声。
あ、胸を火傷しちゃったじゃない。重症よ。もう、貴方のせいよ。
貴方の優しさのせいよ。
私は、キッドを真っ直ぐに見つめた。
「じゃあ、もう少し私の話を聞いてくれる？」
「もちろんです」
キッドの言葉に、私は、安心した。
彼には、全てを話そうかしら。と、なぜか、私は思った。

「……私には居場所なんてないのよ」
私は、涙声で訴えた。
まるで、本当の子どもみたいに。

「どうしてですか？」
キッドは、相変わらず優しい声を発し、聞いてきた。私は、それにふわりと包まれなから、答えた。
「だって、私は、犯罪者だから……」

「……え？」

「私ね、その例の組織の一員だったのよ」
私の口から零れたのは、私自身の真実と、涙の余韻で少し震えた声だった。
私は、自身を剥き出しにするのは苦手なはず。だけど、今は嫌悪感なんて何一つ感じかった。
「どういうことです？」

「私ね、その組織から抜け出したのよ。私は、そこで、薬を作っていた。でも、まさかそれが毒薬だとは夢にも思ってなかったわ」

「ど……毒薬！？」

キッドは、驚いたような声を出した。当たり前ね。こんな子どもの口から、”毒薬”なんてね……。

この人、こんな私のことどう思うかしら？

私は、キッドの顔を見つめた。私の視線に気づいたらしく、キッドは、私を見て、『あ』という表情をした。

彼は、咄嗟に謝ったが、私は、聞こえない振りをし、続けた。

「ええ。毒薬よ。毒薬を作らされていたのよ。

……だけど、そんなある日、組織に姉が殺された。組織は、姉を殺した理由を教えてはくれなかったわ。

だから、私は、真実を言ってくれるまで、私はその薬を作るのをボイコットすることにした……。

そうしたら、個室に監禁されてしまったの。殺されることはもう分かっていたから、私は自殺するつもりで、隠し持っていたその薬を飲んで……」

私は、そこで止めた。言いたくないわけじゃないんだけど。薬で簡単に人間が幼児化するなんて、普通の人間には、理解し難いものだと思ったから。

彼には何でも言おうって言っていたくせに。

そうやって色々と考えていたら、

「身体が縮んでしまった……と？」

と、キッドが、私が言う前に、言ってくれた。私は、少し嬉しく感じた。

「ええ」

「そうでしたか。どーりで、大人びておられると思いました」

私は、彼の言葉にはっとした。

彼は、何の動揺も、疑いもなく私を受け入れてくれていた。
それが、ものすごく嬉しかった。

「ありがとう。……あ、それと、工藤君のことは知ってるわよね？」
ちゃっかり、彼にお礼を言ってみた。それと、疑問に思ったことを直球でぶつけてみた。まあ、答えは、予想つくけどね。

「ええ」

「やっぱり……」

「彼もあなたと同じで、薬で……？」
「……そうだけど、どうして、あなたは工藤君の正体を知っていたの？」

「私は、その大きい探偵君と一度対決したことがあるんですよ。彼はすごかったですよ。見事に私を追い詰めてみせました。
結局それは、引き分けに終わりましたが、私をあそこまで追い詰めた彼のことが気になって、それ以来マークしていたんですよ。
そうしたら、彼に似たボウヤが現れたんです。だから、これは何かあるな、と……（ｂｙ青山先生）」

私は、なるほど、と思ったけど、少し腑に落ちないところがあった。
それだけで、人間が幼児化したなどという推測が出来るのかしら……？

「だけど、たったそれだけで、”工藤新一”だって、断定できないでょ？」

「まぁ、そうですね。小さい探偵君と初めて対決したときのことで

す。
私が、彼に名前を尋ねたとき、彼は、”江戸川コナン”と名乗ったのに、彼が持っていた無線の相手は、彼の事を”新一”って呼んでいたんですよ。
まぁ、その時は私はまだ半信半疑でした。そして、また探偵君と対決する機会があったんです。その時、私は船の電話を盗聴していました。そしたら……」

「……そしたら、電話の相手は、博士で、また彼のことを”新一”と呼んだ……ってことね」
私は、ため息まじりにキッドの話を先読みした。
「ええ。まあ、そういうことです♪」
「あ、そう……」

なるほどね……。それにしても、工藤君、ちょっと迂闊だったわね。
私は、工藤君の顔を思い浮かべ、ふっと、静かに鼻を鳴らした。

「薬で小さくなったとまでは、さすがに分かりませんでしたけどね」
キッドは、うっすらと笑い、私の方を見た。
今まで気になっていたライバルのことを知り、少し嬉しそうに見えたのは、気のせいではないわね。

なによ。私の気持ちも知らないで……。そんなキッドを見て、私はため息をついた。
同時に悲しみの感情も湧き出てきた。
「私の所為よ。私があんな薬を作ってしまったからなのよ……！！」
「あっ、お嬢様……！」

キッドの焦った声が遠くで聞こえた。まるで、玩具(おもちゃ)が壊れてぐず

ってる子どもみたい。
止めようと思っても、止められない溢れ出る感情。
「私の作ったあの薬の所為で、彼は幼児化してしまったのよ……！！”彼と彼女”を離れ離れししてしまったのよ……！」
「お嬢様、顔をあげてください。あなたは罪人などではありません」

優しいはずのキッドの言葉に、イラついた。
やり場のない罪悪感が私のすべてに固く蓋をしてしまっているみたい。まるで私のすべてを支配してしまっているみたい。
水のように流れるのを止めない私の感情。
「どこがよ！？立派な罪人よ！！！私は！！！」

とうとう、私らしくない、ヒステリックな声をあげてしまった。
博士に聞こえる……と、思ったけど、どうやら大丈夫だったみたい。
多分ね。

この空間に、キッドの息づかいがやけに響く。
「……。世間的に言えば、確かにそうですね……」
「そうよ！！」
「……私も罪人です。ですが、罪人同士にしか、分かり合えないこともあるんじゃないでしょうか？
私だって、好きで罪人になったわけじゃない。仕方が無かったんです。
貴女もそうでしょう？ですから、自分が不幸だとは思わないでください……」

キッドの哀しげな声と、その言葉に私は、ハッとした。さっき湧

き出た感情は、もう、どこかに逝ってしまった。
「それもそうね。なんか私どうかしていたわ……。じゃあ、貴方に一つだけ聞いていい？」

「どうぞ」

「……あなたは、なぜ盗むの？なぜ怪盗キッドをやっているの？……もしかして、亡くなったお父さんと関係があるの？」

少し躊躇いはあった。
だけど、私の全て（一部に過ぎないのかも知れないけど）を話したんだし、聞く権利はあるはずよね。
キッドは、何かを決心したように静かにゆっくりと口を開いた。

「ええ、その通りです。
……私の父親は、初代の怪盗キッドでした。それと同時に、世界的に有名な天才奇術師（マジシャン）でした。父は、私の憧れでした。ですが……」
キッドは、話すのを一旦止めた。だけど、私は口を挟んだりはしない。キッドがまた話し出すまで静かに待っている。
数秒もたたない内々に、彼は、口を開き、続けた。
「8年前のマジックショー中に、父は爆発に巻き込まれて行方不明に……」
「え、亡くなったんじゃなかったの……？」
「ええ、そういうことになっています。爆発に巻き込まれて死んだって……。
ですが、父の遺体は見つからなかった……」
「そうだったの……」

私は、うつ向いた。
私、本当、馬鹿みたいね。私だけ不幸なんだって、そんな錯覚に陥

ってしまっていたなんて……。
私は、キッドを、さっきとは違う表情で見つめた。
彼、気づいてるかしら？
キッドは、息を一つ吐いてから、また話を始めた。

「……そして、父の死から9年の月日が流れたある日、ひょんなことから、父の正体がキッドだったことを知ったんです。
そして、私は、父の後を継ぎ、怪盗キッドになることで、あたかも父がまだ生きているように見せかけ、父を殺した奴らを誘き寄せることにしたんです……」

「……それで、それが成功したのね？」

「ええ。彼らは、私のことを父だと思い込んでくれましたよ。まだ生きていたとはな、と。その言葉で私は、全てを悟りました。
彼らが私の父を殺した犯人だということをね……」

「……やるじゃない」

「いえ、いえ。……それで、彼らの狙いがビッグジュエルだと分かり、私は誓ったんです。父の仇より先にそれを見つけて、私の手で粉々にぶっ壊してやるって……。
まぁ、彼らに宝石に手を出したら命はないと言われているのですが、怖じけづいたりはしません」
　そう言った彼は、いい表情（かお）をしていた。そして、彼の綺麗な青色の瞳は、輝いていた。
私は、そんな彼の顔につい見とれてしまった。そんな彼の光は、暗い闇の私にとって、とてつもなく眩しくて……。
似た境遇に置かれている彼と私。なのに、人間が違うだけでこんなにも違いがあるのね。少し感心してしまったわ。

「素敵な理由じゃない。亡くなったお父さんのために怪盗キッドをやっているんでしょう？」
私が、感じたことをさらりと言うと、キッドは少しだけどこか切なそうな表情をした。
「犯罪の動機に、素敵なものなどありません。どんな理由があろうとね……。
ですけど、こうもしないとやりきれない。生きてゆけない。だから、しかたがないんです……」

キッドは、ふっとうつ向き、真っ白いシルクハットを深く被り直した。
だから、表情は見えない。だけど、彼の気持ちはシルクハットごしでも伝わってくるわ。

「そう……よね。私もね、亡き両親の後を次いで、研究を続けているのよ。
あなたと似た境遇みたいね。ごめんなさいね。私だけ不幸ぶっちゃって……」
「そんなことないですよ。大丈夫ですから、どうか謝らないでください……。貴女のこと、ちゃんと理解してますから」

ふわり。
彼の温もりにきゅっと包まれた気がした。
涙が溢れた。止めようとすればするほど、流れ出る。溢れ出る。
あ……止まらない。
はっはっはっはっ、と私の息は早くなる。

ふいにキッドの声が聞こえてきた。

「泣くことが弱いことだなんて、私は思わないです。むしろ、素直な自分をさらけ出す勇気は素晴らしいと思いますよ。
涙は宝石なんですよ。そんな美しい宝石を、心の内に秘めるのは、もったいないですよ。涙は心の落し物です。新しい宝石へ生まれ変わろうと脱皮したかけらなんですよ……。
そのかけらが漏れるのを我慢しすぎたら、心はいつまでも成長しません……」

また……。彼の言葉が私の胸に染みた。
私は、タオルで涙で濡れた顔を拭いた。

「……。まったく、貴方が言いそうなセリフね」
だけど、胸の奥深くに痛いほど染みたわ。ちょっと悔しいけど。
本当(ホント)、ハートフルな泥棒さんね。
ホント……ホント……。

また涙が溢れた。
まるで、噴水のように……止まらない。

キッドが、私の背中をポンポンと静かに、温かく、優しく叩いてくれた。
温かい彼の手。洋服ごしでも、彼のその体温(ぬくもり)が伝わってくる。
私は、今、彼に優しく抱きしめられている。
恋人とか、そんな感じじゃなくて、なんかお兄ちゃんみたいな感じね。いや、お姉ちゃん……。
彼は、男の人なのだけれど、お姉ちゃんと同じ温もりを感じた。なんか、不思議な気分。
私は、本当は、18歳。彼も多分そのくらいでしょうね。私がこんな姿じゃなければ、きっと恋人同士に見えるでしょう。
だけど、今は……。

「押し隠す強さも大事ですが、それを放つ強さも大切ですよ。我慢し過ぎたら、貴方の大切な心……宝石をなくしてしまいますよ？」
「キッド……」

彼は、私の体を静かに離し、腕時計を見た。
「フォー、スリー、ツー、ワン……」
カウントダウンが終わったと思うと、彼は顔を上げ、私の方を見て、最高の笑顔で言った。
「メリークリスマス、１２時を告げる針の音がたった今聞こえましたよ、お嬢様、新しい今日の始まりです。昨日という仮面をどうぞ、脱ぎ捨てて下さい……」
「フッ、相変わらず気障な人ね。メリークリスマス、気障な泥棒さん……」

静かに呟く私。
そして、私は、私の唇が、”あるところ”に向かおうとしていることに気が付いた。無意識。
え……。え！？ちょ、ちょっと、待って！！！
「あ……」
キッドは、ふっと声を漏らした。
その声に私は我に返る。そして、私の唇は、キッドの頬に触れていた……。

なぜこんなことになっているのか自分でもよく分からない……。

「あ……／／／／」

顔が熱い。なんか私、変よ。なんでいきなりほっぺたにキスなのよ！？

顔が熱い。多分、赤くなっているわ。鏡なんか見なくても分かるものなのね。

恥ずかしくて、キッドの顔をまともに見られない。

私の目は、淡いクリーム色のカーペットばかりを映している。

「ねぇ、帰って……！帰ってよ！！！／／／」

私は、キッドの方は見ずに、クリーム色を見つめながら言った。

私、最悪ね。認めたくはないけど、彼にキスをしたのは私なのに。

私の瞳からは、さっきとは違う涙が出た。

キッドの顔は、見てないけど（とても見れないけど）なぜか、彼がふわりと微笑んだ気配がした。

「……ありがとうございます、お嬢様。素晴らしいクリスマスプレゼントをいただきました」

「い……今のは違うのよ！！！／／／／」

キッドの言葉に私は、真っ赤になって否定した。

ちょっと、馬鹿なこと言わないでよ！！

だけど、キッドはまた優しく微笑んだ。

「さっきのは、貴女の気持ちだと思いますよ？私もそう受け取っています」

「私の気持ち……？」

私は、顔を上げ、子どもみたいに首をかしげながら聞き返した。
「ええ。貴女は、誰かに思いきり甘えたかったのではないですか？」
「……そうかも知れないわね。たった一人の家族の姉もいなくなって、私、今でも寂しかったから……」
私が言い終わると、キッドの雪のような真っ白い手袋をはめた右手がふいに私の頬に伸びてきた。
彼は、私の頬を柔らかく撫でてくれた。
気持ちいい……。なんだか落ち着く。
「……やっと、素直になれましたね。ですが、他人（ひと）に隠し続ける……その方がひょっとしたら貴方らしいのかも知れない。
ですが、我慢（むり）しすぎるのは禁物ですよ。泣きたい夜は思いきり泣いて下さい。そして、心を開ける人を見つけて下さい」
心を開ける人……。そういえば前に、工藤君に本当の素顔を見せかけてしまったことがあったわね。
だけど、今は無理。彼に本当の顔を見せていいのは、彼女だけだと思うから。
ごめんなさいね。離れ離れにしちゃって……。
私は、タオルで涙の残り跡を拭いてから、キッドがいるであろう方を向いた。
だけど、私の瞳は彼を映さなかった。開いた窓から入り込んだ風で揺れているカーテンが一番先に視界に入った。
「あれ……？」
いない。キッドがいなくなってる。
はあ、私は小さくため息をついた。

なんなのよ。突然現れて、突然消えるなんて……。まったく、気障なのにもほどがあるわ。最後にあんな気障な言葉を残して消えるなんて。
私は、彼のあまりの気障さに呆れてしまった。
さて、もうそろそろ寝ようかしら……。

だけど、今はまだ寝れそうにないわ。まだ、この闇空を眺ていようかしら。
何かが起こる訳でもないけど。今はまだ、この空を見ていたいわ。
さっきのキッドの声と温もりが忘れられないし……。
そう思って、水玉のタオルを優しくテーブルにおき、窓の方を向いた。

ふわっ。風が私の頬を撫でた気がした。

「お嬢様♪」

＜誰か＞の柔らかい声が聞こえた。
誰だかは、分かったけど、ふいに声を掛けられたので、少々驚いてしまった。

「え？あ……」
私は、目をパチクリとさせた。やっぱりキッド……。
「お嬢様、ただいまもどりました」
キッドは、いたずらっ子のようにニコッと笑っていた。
これが彼の本当の顔なのかも知れないわね……と私は感じた。
それが、見れて良かったわ。
「な、何よ……／／／」
な～に、赤くなってるのかしら？私。
だけど、少し嬉しさがあったかもしれない。彼にまた会えたって…

…。
だって、今までまた会えると信じていた人たちとは、もう二度と会えなかったんだもん。

キッドが後ろ手に何かを持っている。それがなんなのかは、よく分からないわ。
……いえ、気障な泥棒さんのことだから、「クリスマスプレゼントです」とか言って、バラの花束を差し出すとかかしら……？
ごそっと、キッドの後ろ手（右手）が動いた。

「この花をどうぞ」
キッドが私に差し出したのは、小さくて可愛らしい花束だった。
色違いの小さな花が上手にまとめられていた。
ピンク、黄色、紫、白……と、色とりどり。なんか、私には似合わないわ。吉田さんに似合いそうね。

「これ……プリムラ？」

私は、少々慣れない単語を口に出した。
この前、吉田さんに付き合って、近所の花屋に行ったのよね。この花が、花屋の店先に置いてあったわね。たしか、”プリムラ”であってると思うけど。

「ええ、そうですよ。では、これの花言葉をご存じですか？」
キッドは、私に花束を手渡しながら言った。
私は、それを受け取る。
「花言葉……？さあ、知らないわ」

「……”神秘的”です」

「し、神秘的……？」
「ええ。貴方にふさわしい花言葉ですよ？」

キッドは、吸い込まれてしまいそうなほど綺麗な瞳で私の瞳を見つめた。
私には、キッドの言葉が理解出来なかった。
私には似合わないわよ。

「私が神秘的……？こんな罪人が？私には、悪とか、孤独とか、そんな言葉が似合うと思うけど？」
「……そうでしょうか？私は、貴方にピッタリだと思いますよ？隠し続け、滅多に美しい宝石を見せない、そんなあなたは実に神秘的……ミステリアスだと思います。
”星の闇”。それは、とても神秘的（ミステリアス）だと思いませんか？」
キッドは、夜空の星を眺めながら、まるで歌っているかのように、さらさらと言った。
「星の闇？」
私が、聞き返すと、彼は、くるりと私の方に顔を向けた。
「ええ。貴女のことです。貴女には、この言葉がよく似合う……」

星の闇……？
この意味、考えてもよく分からないわ。
まあ、彼のことだからどうせ気障なことだと思うけどね。

「まぁ、その意味、よく分かんないけど、ありがとうね……」
「いえ、いえ。お嬢様が望むなら、またいつでも参上しますからね」

キッドの声に、ポッと顔があったかくなった。
私の変な意地で『余計なお世話よ』と言いかけたけど、止めた。
無駄に意地を張ったって、虚しくなるだけだもの。

「そう……」
私は、吐息まじりの声で呟いた。そっけないのは、一種の照れ隠しなのかも知れない。そう思いながら、キッドの顔を見つめた。そしたら、キッドは、あるものを見つめていていることに気が付いた。
私は、気になって彼の視線を追ってみた。その視線の先にあったものは……

「あの花……」
キッドの声がして、彼の方に視線を戻した。
「ああ、あのダイアモンドリリー？」
私はそう言いながら、また、さっきの方向に視線を動かした。
私の視線の先には、可愛らしいピンク色の花。
「ええ。あの花を一輪、もらえませんか？」
「ええ、いいけど……」
私は、薄い水色の花瓶にいけてあるダイアモンドリリーを一輪、そっと優しくとった。ふと、私は、哀しげな表情になる。
ダイアモンドリリー、名前の通り、いつ見てもとても綺麗な花ね……。

それを渡す前に、キッドが話しかけてきた。
「お嬢様はこの花の花言葉、ご存じですか？」
私は、彼のその質問に反応した。懐かしい、記憶、温もり、そして、お姉ちゃんの表情が甦る。
分かるわよ……。
「……”また会える日を楽しみにしている”よね？」

私の頭の中に、お姉ちゃんの笑顔が浮かんだ。
でも、本当は無理してたと思う。

「よくご存じですね」

「ええ」
私は、手に持っているダイアモンドリリーを見つめながら、話し始めた。

「よく姉が突然いなくなった恋人を想って、その花言葉を呟きながら、この花を部屋に飾っていたから。
でも、結局、その恋人は、帰ってはこなかったけどね。だけど、お姉ちゃんは、その恋人を、殺される時まで、信じ続けてたわ。いいえ、今もきっと……。
私、その彼を憎んだこともあったわ。でも、お姉ちゃんがこんなにも愛していた彼だったから……」

私は、キッドと目を合わせた。「本気で憎んだり出来ないわよ……」

キッドは、はっという顔になった。私は、哀しげな、切なげな表情をして……でも、微笑んで、複雑な表情になった。
そんな表情になっていることは、やっぱり、鏡なんて見なくても分かるわ。

「はい、どうぞ」

私は、ダイアモンドリリーを彼に差し出した。
泣いたり、苦しんだり、笑ったり、そんな記憶がたくさんある。この花にもきっと宿っていると思うわ。
彼になら、この花をあげられる。

私は、いつの間にか、笑っていた。彼が、笑顔で受け取ってくれた。
「ありがとうございます。お嬢様。たくさんの思い出がつまったこの花は、とても綺麗ですよ」
私は、嬉しかった。綺麗だと言ってくれた。
彼が誉めてくれたのは、この花の綺麗さだけじゃない。嬉しいわ。本当に。
キッドは、優しい満面の笑みで言った。
「お嬢様、では、これがまた今度の密会のキップってことで♪」
「え……」
私は、密会という言葉にドキリとした。
私は、それに対して、何か言おうとしたけど、なんかキッドが言いたそう。
キッドは、何か思い出したような表情をして、
「あ、そうそう……」
と、ごそごそと、マントの中を探りだした。
何をやってるのかしら？
数秒待つと、彼のマントの中から、小さな可愛らしい鉢植えが出てきた。
はぁ？なんでそんなとこから出るのよ！？貴方はドラ○もん！？
……ま、まあ、いいわ。彼、マジシャンだからね。いいえ、魔法使いかしら？

「クリスマスローズです。これもあなたに……」

キッドは、私に、そのクリスマスローズの鉢植えを差し出した。
よく見ると、その鉢植えには、キッドマークがプリントしてあった。
……。
これは、笑ってもいいかしら？

「……くれるの？」

「どうぞ。あ、ちなみに、花言葉は、”私の心配を和らげて”です。
それが今の貴方の気持ちですよね……？私も、そう受け止めてます」

ちょっと、勝手に他人（ひと）の気持ちを推測しないでくれる？
って言おうとしたけど、あながち、そうだったりして、否定する
ことは出来なかった。
私は、こくりと、小さく頷いた。

「では、このクリスマスローズが、あなたの密会のチケットという
ことで♪
あの水色の花瓶の横に置いておきましょう。今日のことをお互い忘
れてしまわないように。もう一度言います。お嬢様がが望むなら、
いつでもきますからね」

やっぱり、彼の声と言葉は優しいわね。
私は、そんな彼に少しだけ、ほんの少しだけ、ほんのちょっとだけ
甘えることにした。なんか、少し悔しいけど、すごく心地良い。
「ええ……」

「……では」

彼は、雪のように真っ白い翼を広げた。
彼のそれは、ホワイトクリスマスを連想させた。
私は、聖夜の夜空を白い翼を広げて飛ぶ、彼の姿を見送っていた。
「ありがとう、キザな泥棒さん……」
そう呟いた頃には、もう彼の姿は、豆粒ほどになって、終いには、その白い姿は、都会の空の中に消えていった。
私は空を見上げた。
雲は移動し、綺麗な三日月が見えていた。
そして、夜空に輝く小さな小さな星達。
星の闇。星の裏側には、一体なにがあるんでしょうね。興味深いわ。
星の闇。
確かに、それはとても、ミステリアスかもね。
やっぱり、私にふさわしい言葉なのかしらね？
私の本名、”宮野志保”……”みやのしほ”を逆読みしたら、”ほしのやみ”になるからね。
そうでしょ？キザな怪盗さん……？

（後書き）

どーも、月影です。
はぁ～、クリスマス終了ギリギリでした。ラスト１０分の奇跡でしたヨ。ホントに……（笑）
えーと、やっちゃいました。平哀の次は、快哀です。なんか、最近、マイナーばっかり書いている気がします…。潤七とかも……。まともなのは、蘭コぐらいですよ（^―^；）
まあ、楽しんで読んで下さったら嬉しいです。
あなたは一人じゃないよ。支えてくれる人がそばにいるから。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7755f/

星の闇。

2010年10月9日20時36分発行